2 カパーロマン
時代とともに、進化しつづける伸銅品
3 SDGsに向けて…
日本伸銅協会会員企業によるSDGsへの取組み
4・5 カパーテクノロジー
絶縁体にも導体にも独自の工夫
世界をリードするXLPE海底ケーブル
6・7 WITH CORONA時代に
わずか2分!で新型コロナウイルスの感染価が検出限界値まで減少
銅合金蒸着マスク
8・9 カパートピックス
銅の優れた特徴をPRする子ども向けイベント
2か所で「銅の超抗菌性能に関する実験教室」開催
10 カパーワールド
ひとひらに建築板金職人が想いを込めた
緋銅のバラ
11 銅センターニュース

No. 194

カパーロマン

時代とともに、進化しつづける伸銅品

一般社団法人　日本銅センター　副会長
一般社団法人　日本伸銅協会　会長
JX金属株式会社　常務執行役員
百野　修

私がJX金属（当時は日本鉱業）に入社したのは1985年。配属先は伸銅品を製造している倉見工場（神奈川県寒川町）の生産管理課でした。文系出身で、そもそも『伸銅品』という単語も知らず、まったく未知の世界での会社生活のスタートで、この業界にこれほど長くお世話になるとは、夢にも思いませんでした。

配属されてまず与えられたのは大き目の電卓。これで毎日品種ごとに生産実績を集計し、計画に対する過不足を、タテヨコの数字を合わせつつ資料作成するのが最初の仕事でした。面倒でしたが、伸銅品の種類や用途を早く覚えるには都合がよかったです。当時の伸銅品の用途は、まず自動車のラジエーター（タンク材、チューブ材、フィン材）が圧倒的に多く、他には端子コネクター材、屋根板材、電線テープ材、さらには少量でしたが優勝カップ用など、世の中にこれほど身近に伸銅品が使われていたのかと驚いたものです。

その後は生産管理と営業の職場を何度か往復しつつ現在に至るわけですが、この約40年弱に伸銅品の用途も随分と変化しました。先ほど電卓の話をしましたが、それ以外で思い出す入社当時のオフィス用品は青焼のコピー、工場のダイヤル式黒電話（外線は総務課が交替で交換手を務め繋いでくれた）、プレゼンはOHP。ワープロはオフィスに数台しかなく時間予約制。パソコンは情報システム課のみ。これがパソコン（当初はデスクトップ型で、机をブラウン管に占領された）、携帯電話、デジタルカメラの時代を経て、現在はこれらの機能の大半がスマートフォンやタブレットに集約されています。

これらの大きな変化に伴いさまざまな電子部品が変化し、世界中の人々の生活が発展を続けているわけですが、それを支えている重要なもののひとつが伸銅品です。銅をベースにさまざまな金属とさまざまな比率で合金化し、圧延、焼鈍など加工方法や製造条件と組み合わせることで、さまざまな特性を出すことができます。業界の奮闘努力のおかげで、先述した世の中の変化が可能となり、人々の文化的生活レベルが上がっていることに、疑問の入る余地はありません。

世の中が変わり、材料に対するニーズが変わり、伸銅品がその特性を適応させて、変化を実現する。この構造は、人間が電気を使う限り、今後も変わりません。次の時代はどのようになるのか、そして伸銅品はどのようにその機能を高めていくのか。楽しみは尽きません。

パソコンやタブレット